

11月初めに歩く朝の孤独 鈴木幸一 III会長

2019/11/19 2:00 | 日本経済新聞 電子版

予約診療室は朝から中国語が飛び交っている。病院側は中国語の通訳を雇用するなど、中国から日本を訪れてこの病院で治療を希望する患者さんの対応策について、随分と周到な準備を重ねたに違いない。放射線からコンピューター断層撮影装置（CT）、陽電子放射断層撮影装置（PET）の検査をする部屋の前で検査を受けるために待つ長椅子にも、中国から来た患者さんが、家族や通訳に付き添われて並んでいる。

私が病院に来たのは、3年ぶりである。3年前にも中国から治療に来たのであろう患者さんは居たはずなのだが、これほど目立ちはしなかった。中国の社会がますます豊かになって、日本での治療を受けられるほど、豊かで余裕のある患者の数が増えたに違いないのだが、病院側の対応も随分と進んでいるように感じる。通訳さんに始まって、様々な手続きをサポートする人まで、病院の対応も進んでいる感じがする。中国ばかりでなく、東南アジアの方も散見するのだが、なんといっても中国から来た患者さんの数が圧倒している。

——十一月の初めに 歩く朝の孤独のために この一生のたくらみを 記するだけのことだ 都にただ一つ生き残っている この武蔵野の門をくぐってみると ひとりの監視人以外に人間らしいものはなにもなかった。——「秋の写真」西脇順三郎

50年を超える時間、目覚めているときは、一時も手放すことがなかった煙草（たばこ）を、6月の終わりに止めてしまった。暑い欧州大陸から涼しいオックスフォード大学に行き、大学からそう離れていない場所にある天皇陛下が通ったというひなびた近くのレストランで、ぬるいビールを飲み始めたとき、ふと「やめたほうがいいかな」と。喉がイガイガしていたのである。

たばこと酒がうまくなかったら、病に決まっていると決めていて、たばこをやめる、酒を飲みたくないといった時点で、どこかしら変調になっているわけで、すぐに病院に駆けつけるべきだと、長年、不摂生の言い訳のように主張を繰り返していたのだが、いざ、その段階になると、たばこをやめても、すぐに病院に行くことはしない。わずかな変調でも、会社のことならすぐにも手を付けるのだが、自らのことは自信過剰が災いして、変調を変調として冷静に捉え、対策を打たない。困った性格である。

3年ほど前、生まれて初めて入院したのも、11月だった。急性胆のう炎とかで、「痛い」と病院に診察を受けに行ったら、そのまま「急性胆のう炎」だからと、着の身着のまま、下着1枚持たず、入院となり、そのまま手術されて、1週間ほど病院に留め置かれた記憶がある。秋の気配がすると、たった一度の病の記憶が浮かんてくる。

今年7月になって、37度前後の熱が下がらない。それでも、なんとか夏の間はヨーロッパをうろちよろしていた。一度、休憩のつもりで、イタリアに近いスイスの避暑地ルガーノで2日ほど休もうと思って予約をして、チューリヒでミーティングを終えた後、ホテルに泊まったのだが、部屋に入るなりぐったりして、美しい景色も眺めず、ひたすらベッドでうつらうつらしたままだった。さっさと帰国して病院に行くべきだったのだが、その後もイタリアで、指揮者のムーティさんと話をしたり、道楽である音楽祭のことで、ナポリの歌劇場に行ったり疲労を重ねる日々を過ごし、日本に帰国すれば、何かとせわしく過ごし、たばこをやめるほど、私にとって深刻な事態を忘れたまま、8月の末から、再び欧州で、いくつか用件をこなしていた。

たばこはやめたはずが、羽田空港ではメビウスの10ミリを2カートン買い込んでいたのだから、相当狂っていたのである。ベルリン、パイロイト、ドレスデンと回っている間、一本のたばこも吸っていないわけで、買い込んだたばこは、余計な荷物のまま、小さなラゲッジの空間のある部分を占拠したままだった。

ラグビーのワールドカップが始まって微熱が続き、無駄な抵抗をやめ、オフィスから昼休みに病院に行ったら、そのまま「すぐ、入院だね」となってしまった。肺炎である。人間、「悪い」とされている習慣を自らやめるときほど、危ういことはないようだ。結局、半月ほど、入院する羽目になってしまった。治療に当たっていただいた教授には、「今回はぎりぎり運が良かっただけで、くれぐれも、日々健康に留意しないとイケない」と、やんちゃ坊主を諭すような言葉で叱られた。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（III）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒と音楽、読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

海外に行くたびに買い込んだたばこが本棚においてある。2度とふかす機会はないはずのたばこである。捨てるか、愛煙家に贈呈するかしないといけないのだが、未練がましく飾ってある。そういえば、ここ何年か、たばこの消費が多くなるのは、ない頭をたたいて何かものを書くときか、酒を飲んでいるときだった気がする。いずれにしても、目につく場所にこれだけたばこを捨てずにおきながら、火をつけようとなしないのだから、このたばこのカートンは、懐かしき墓標として、置いたままにしようかと思っている。

「ネットを利用して、海外の病院にいたまま、先生の執刀する手術を受けられるようにはしていないのですか」「ここで画面を見ながら、ヨハネスブルクの手術室にいる患者さんに執刀するといった医療行為が、早く現実のものになるようにしたいですね。鈴木さんも病院のベッドで、時間を費やすようなことがないような生活をして、私たちが、将来の姿と想定している様々な未来のことを実現するために頑張ってくださいよ」

わがまを言って、さっさと退院をしようとした朝、面倒を見ていただいた教授とお茶を飲みながらいろいろと話し込んだ。買収ひとつせず、30年近くも自らの技術開発に懸けてきた時代遅れのIIJだからこそ、次の世代に大きな貢献ができるはずだと、退院して帰宅する車で、ふと、考えたりしたのだ。

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.